人文学研究科における貴重な資料保存に関わる動き

海外交流

山　根　　聡*

Trends related to the preservation of valuable materials in the Graduate School of Humanities.

Key Words：Preservation of manuscripts, Indian Ocean Rim literature.

大阪大学は、2022年より、人間文化研究機構（NIHU）が推進する「ネットワーク型基幹研究プロジェクト」の一つ「グローバル地域研究推進事業」のなかで、12の大学や研究機関が参加する「環インド洋グローバル地域研究」に参画し、阪大研究拠点「文学・思想の混交性と創造性」として研究活動を進めている。本プロジェクトには阪大のほか、国立民族学博物館の「移動の連関性と連続性」、東京大学の「開発、環境、医療」、京都大学の「平和的共生」の研究班がある。プロジェクトは、インド洋をとりまく世界に焦点を合わせ、ヒト、モノ、情報、価値等の流動がこの世界内外での様々な関係性の生成・発展・蓄積あるいは消滅に関わってきた動態を解明することを目的とし、第1期は5年間の計画として進められている。阪大拠点では、人文学研究科外国学専攻の教員や内外の研究者が、東南アジア、南アジア、アフリカの文学や思想を研究テーマとして研究会や国際会議を開催し、インド洋を囲む地域での文学や思想の連関性や影響関係を研究している。

本プロジェクトでは、研究活動とともに、世界に散らばる貴重な文献、特に写本等のデータ化の計画が進められている。昨年、「大阪大学人文学デジタル・ライブラリー（OUDiLHum）」を立ち上げ、研究対象とする地域の写本を中心に、データの収集を開始、整理されたデータは大阪大学学術情報庫（OUKA）で公開することとなっている。データの所蔵については、懐徳堂の文書のデータ公開等の課題もあるため、総長がOUKAの容量を飛躍的に増加してくださった。

2022年夏、学術交流協定を結んでいるパキスタンのパンジャーブ大学図書館を筆者らが訪問して予備調査を行い、2023年3月には学部生6名を引率して再度訪問、写本の撮影作業を開始した。パンジャーブ大学は1870年、当時の宗主国イギリスによって設置された歴史ある研究機関で、所蔵されている写本の数だけでも2万7千冊に上る。図書館内部の奥に位置する写本を所蔵する特別室に入ると、広い部屋に木製の書棚が並び、その量だけでも圧倒的な印象を与えた。われわれが訪問した際には日本人の歴史研究者も居合わせて、彼はペルシア語の写本を講読しているところであり、同図書館の所蔵のすばらしさを物語っていた。文献はパキスタンの国語であるウルドゥー語のみならず、ムガル朝の宮廷言語であったペルシア語や、イスラーム文献で用いられたアラビア語のほか、インドの主要な言語のひとつであるヒンディー語や古典のサンスクリット語、北インドのブラジ・バーシャー語などがあるが、実はその多くは、パキスタンが独立する1947年以前にイギリス人研究者が収集したものである。インドとパキスタンが分離独立した際、パキスタン側のヒンドゥー教徒がインド側に、インド側のムスリム（イスラーム教徒）がパキスタンに移住するという100万人規模の大移動が行われたため、独立後のパキスタンではヒンディー語やサンスクリット語など、主にヒンドゥー教徒が読解する文献を読める研究者が不在となった。加えて、パキスタンに足を運ぶ欧米の研究者が多くないため、これら貴重な文献資料が研究者の目に触れにくい状態になっていた。パンジャーブ大学ではこうした文献のデータ化が進めら

* So YAMANE
1964年3月生まれ
博士（京都大学）（2019年）
現在、大阪大学人文学研究科外国学専攻
教授　博士
専門／ウルドゥー文学、南アジア・イスラーム論
TEL：072-730-5296
E-mail：soyamane.hmt@osaka-u.ac.jp

れているものの、そのスキャナーも新しいものではなく、ゆっくりと進められていたので、研究者に届くには時間を要する状況にあった。本学のプロジェクトでは、こうした貴重な資料の存在を知らしめるべく、パンジャーブ大学とともにデータ化を進めている。文献には本学教員が解題を付すことにし、資料の概要や価値を紹介することとなる。

インドでも貴重な文献は数えきれないほど所蔵されている。公立図書館や文書館のみならず、素晴らしい蔵書を抱える私立文書館もある。だがなかには、ヒンドゥー教徒以外には公開しない文書館もあり、欧米の古典研究者がアクセスできない状況に置かれている。今回訪問した文書館は、旧大阪外国語大学のヒンディー語学科で客員教授を務められたインド人研究者の縁戚が創立したことが縁で、本学のヒンディー語専攻の日本人教員は歓迎され、データ化の許可を得ることができたのであった。そのインド人の先生の祖父は、インドの独立運動においてガーンディーとともにインド代表としてイギリスに赴いて交渉し、インド国内に４つの大学を設立した人物である。インドには教員と大学院生１名が渡航し、文献の撮影を進めた。

昨今、人文系の文献のデータ化は各国で進められている。わが国でも人間文化研究機構の国文学研究資料館が日本各地の文書のデータを集積しており、イギリスではケンブリッジ大が中心に活動を進めている。だが、本学の研究者が蒐集する文献のなかには、欧米の研究者がアクセスできないようなものがあり、人文系の研究のさらなる発展に多いに役立つことを確信している。これをさらに進めて、「希少な文献が阪大のサイトで紹介されている」という認識が高まれば、本学が人文系の文献を扱う世界的拠点の一つになるものと期待している。

また、本学が扱う資料は、文学や思想に関する文献のみに限られたものではない。東南アジアでは、「ビルマの竪琴」の手書きの楽譜があったり、アフリカ諸国では会話を録音したデータなども各研究室に所蔵されている。音声データは、世界の言語研究者に貴重な資料を公開することができることになるだろう。

コロナ禍で人的交流が制限された分、オンラインによる研究交流への関心が高くなった。これを機会に、貴重な文献や言語のデータをオンラインで世界の研究者と共有できるようにする動きが加速するのは望ましいことである。そして、欧米の研究者がアクセスしにくい文献資料蒐集において日本人研究者、特に大阪大学人文学研究科の教員が人的ネットワークを駆使して中心的役割を担うことは胸を張りたいところである。